平成28年第１回島田市総合教育会議議事録

日　時	平成28年６月20日(月)午後１時31分～午後２時58分
会　場	島田市役所　第３委員会室
出席者	染谷絹代市長、牧野高彦委員長、五條早規子委員、高橋典子委員、北島正委員、濱田和彦教育長
欠席者	
傍聴人	
説明のための出席者	畑教育部長、鈴木教育総務課長、田中戦略推進課長、池谷学校教育課長、岩尾学校教育課指導主事
会期及び会議時間	平成28年６月20日(月)午後１時31分～午後２時58分
議事	(1) 緊急の場合に講ずべき措置について (2) 教育を行うための整備等重点的に講ずべき施策について

開　　会　　午後１時31分

染谷市長　定刻になりましたので、ただいまから第１回総合教育会議を開催いたします。

開会に当たりまして、私のほうから一言ごあいさつを申し上げます。

まず、先ほど久し振りに一緒にランチをとりながら、いろいろとお話をさせていただいて、こうした、まさに教育委員会の時の研修の時間があった後に教育委員会が始まるような、そういった時間を持たせていただいたことを心から感謝を申し上げます。

昨年の６月２日に島田市として最初の総合教育会議を開催しました。そして、昨年度は４回の会議を持たせていただきました。この会議の成果として、島田市教育大綱を作成することができました。皆様本当にありがとうございます。

本日は、平成28年度の第１回目の会合を開催させていただくことになりましたので、よろしくお願いいたます。

昨年度の会議の中でも、皆様から教育に関する課題等について、たくさんの御意見をいただいております。今年度はその中から喫緊の課題について洗い出し、解決に向けた話し合いをしていければと考えております。どうぞ、よろしくお願いいたします。

では、ここで牧野教育委員長からごあいさつをお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

牧野委員長　皆さん、こんにちは。

２年目を迎えまして、いよいよ総合教育会議、本当の話ができたらいいなと思って、この席にまいりました。大綱もできましたので、なお一層島田市がうまく回っていきますように、よろしくお願いしたいと思います。たくさんの御意見よろしくお願いします。

［　議　事　］

染谷市長

ありがとうございます。

それでは、皆様のお手元にあります第１回総合教育会議の次第に従いまして、議事を進めてまいりたいと思います。

まず、議事の（１）緊急の場合に講ずべき措置についてであります。これについては、本年３月に島田市いじめ問題対策連絡協議会等設置条例を制定いたし、４月から施行しております。これによって、いじめ問題に起因する重大事故発生時には、教育委員会の付属機関である、島田市いじめ問題対策専門委員会での調査や、市長の付属機関である、いじめ問題調査委員会で再調査をする仕組みを整えました。ここでは、児童生徒等の生命または身体に被害が生じた場合等の緊急の場合における島田市総合教育会議の位置付けについて、いじめ問題を例に事務局から説明をいたします。お願いします。

岩尾学校教育課指導主事

それでは、説明させていただきます。

いじめ問題における重大事態に対して、市や教育委員会は調査を行うための付属機関をあらかじめ設け、いざという時に対応しておくことが望ましいとされています。いじめ問題における重大事態とは、いじめにより児童等の生命、心身または財産に重大な被害が生じた疑いがあると認める時、いじめにより児童等が相当の期間、年間30日程度ですが、学校を欠席することを余儀なくされている疑いがあると認める時とされています。さらに、児童生徒や保護者からいじめられて、重大事態に至ったという申し立てがあった時も含まれます。

実際に、島田市において、重大事態発生時の対応はどのようになるかをフローチャートで示します。資料のフローチャートをごらんください。大きいフローチャートです。よろしいでしょうか。

重大事態と思われる事案が発生した場合、学校は速やかに教育委員会に報告します。教育委員会は、調査主体を学校か教育委員会のどちらにすべきかを判断します。調査主体を学校とした場合、学校が調査を行います。学校は調査結果を教育委員会に速やかに報告します。この報告をもとに教育委員会は、重大事態であるかどうかの判断を行います。重大事態であると判断した場合、市長へ報告します。さらに、学校は保護者へ情報提供し、調査結果の報告をします。最終的に報告書を教育委員会に提出します。

次に、調査主体を教育委員会とした場合、状況等を調査しながらも学校への支援を行います。調査の結果をもとに、教育委員会は重大事態であるかどうかの判断をします。重大事態であると判断した場合、市長へ報告します。教育委員会はこの重大事態に対し、必要に応じて、いじめ問題対策専門委員会を設け、調査を指示することができます。いじめ問題対策専門委員会は、保護者へ調査結果の報告をするとともに、市長へ調査結果の報告をします。

教育委員会から重大事態の報告を受けた市長は、総合教育会議にて教育委員と情報の共有を行います。教育委員会やいじめ問題対策専門委員会からの報告を受けた市長は、重大事態への対処または今後の重大事態発生防止のため、必要があると認める時は、いじめ問題調査委員会にて

再調査を指示することができます。いじめ問題調査委員会は調査結果を保護者へ報告するとともに、市長に報告し、市長は議会へ報告します。

以上が主な流れになります。

島田市における組織の設置及び島田市いじめ問題対策専門委員会の詳細については、資料をごらんください。

以上です。

染谷市長　ありがとうございました。

では、事務局の説明につきまして、皆様から御質問等ありますでしょうか。いかがですか。

よろしいでしょうか。また後で、後ほどお気づきの点がありましたら、どうぞお手をお挙げください。

では、緊急の場合における総合教育会議の位置付けについては、確認ができました。

それでは、次の議事に移りたいと思います。（２）の教育を行うための整備等重点的に講ずべき施策について、意見交換を行います。これについては、昨年度の第４回目の会議において、皆様から幾つかの御意見をいただいております。

まず、これまでの経緯について、事務局から報告をさせます。

お願いします。

鈴木教育総務課長　それでは、（２）教育を行うための整備等重点的に講ずべき施策について、これまでの経緯を御説明いたします。

配布してございます資料２総合教育会議における検討課題についてをごらんください。

１の総合教育会議における課題提案についてですが、ことし２月に行われました平成27年度第４回の会議において、資料に記載してあります（１）の幼児教育についてから（８）の保健師の増員についてまでの項目について提案されました。提案された課題は、それぞれが早期に現況等を探る必要性の高いものであることから、同月に行われました平成28年第２回島田市教育委員会定例会において、教育委員会として検討課題の優先順位を付けていただくこととしました。協議の結果、課題全てに優先順位を付けることはできませんでしたが、資料２の（１）に記載の通り、学校現場での人手不足についてが最優先課題であるということで意見が一致いたしました。

この結果につきましては、教育委員会定例会終了後、教育長から市長に説明を行い、市長から総合教育会議の中で優先的に取り組む課題として御了解をいただいたことから、本日御協議いただく議題となったものです。

なお、資料２の２（２）にありますアからカについては検討の切り口として、教育委員会の皆様から頂戴した御意見です。

これとは別に教育委員会定例会の中で、学校訪問等を通して自分たちが把握している課題以外にも課題は存在するはず、教育現場に携わる教職員が本当に困っているものを課題としたいという御意見から、学校教育課において校長会等の意見を集約していただきましたので、本日具体

的な協議内容として、後ほど説明させていただきます。
経緯についての説明は以上でございます。

染谷市長　ありがとうございます。
事務局からの説明が終わりました。
教育委員会の検討課題の優先順序の決定ということで、学校現場での人手不足についてということを最優先課題としたいということでございます。この件につきましては、現在開催中の市議会定例会におきましても、議員からの一般質問でも取り上げられました。
それでは、学校現場での現状について、事務局から説明をお願いします。

池谷学校教育課長　それでは、情報提供をさせていただきたいと思います。
まず、学校現場のほうは、大きく教育というものを文部科学省が言うカテゴリーで分けた場合に、学校教育と家庭教育と社会教育。この３つに分類されます。学校教育は本来でしたら学校教育のみを行っていればいいのですけれども、今現代においては学校教育に家庭教育の問題が持ち込まれ、また社会教育の役割としても、学校が非常に重要な役割を果たさなければならない時代になっております。
学校教育の中では、今現在９教科の教科で各教科の教育、学問分野を教育しているだけでなく、今叫ばれている道徳教育、キャリア教育、新しい学力観というものについて、学校現場は学習指導要領の改定に向けて、今検証をしている最中です。その中で、切実に報告として求められているものが、まず土壌としてあります。今言ったものだけでも、十分学校現場の多忙化が予想されるわけなのですが、例えば例を挙げますと、環境教育、防災教育、ＩＣＴ教育、人権教育他国際理解教育、性教育、特別支援教育、安全教育、交通安全教育、防犯教育、職業教育、福祉教育、食育、健康教育、同和教育、島田市の場合は放射線教育。まだ２、30言えるのですけれども、今言ったのは少なくとも「これを出しなさい」と言った場合は、ペーパーで全て提出しなければならないものだけ今20ほど挙げさせてもらいました。そういう土壌をまず御理解していただいた上で、具体的にもっと話を進めていきたいと思います。
教職員の多忙化について、市のほうで多くの手だてをくださっているのは本当にありがたく思っております。喫緊の課題に対しては、ほとんど市のほうで手だてを打ってくださっていると思いますが、常に社会変化等の現状がありまして、その中で選択や集中など見直しを図っていく必要が生じています。そのような中で、公務支援システムの導入については成績処理であるとか、志太地区内での教員の異動がこの近隣３市は多いのですけれども、今まで市をまたぐごとに様式、文書等が違っていたものが一律でできるようになったり、出席簿の処理であったり、要録や高校へ提出する抄本であったり、さまざまなところで共通化が図られて大変大きな成果を上げていると思います。まだ、過渡期であるので、その操作であったり、ソフトの細かいところの修正等は必要で課題も多かったりするわけなのですけれども、全体としては大変成果が上がっているというように報告させていただきます。

そして、その他のものは資料を通してお話させていただきます。

「チーム学校」という資料４があるかと思います。最近も新聞等で文部科学省が多忙化についての言及がありましたけれども、資料４の１枚目の資料、客観的な資料として真ん中のところに（３）子供と向き合う時間の確保等のための体制整備というところに、客観的な数字として文部科学省がその多忙化について述べているところがあります。我が国の教員は、学習指導、生徒指導、部活動等、幅広い業務を行い、子供たちの状況を総合的に把握して指導している現状がある。我が国の学校は、欧米諸国と比較して、教員以外の専門スタッフの配置が少ない現状がある。我が国の教員は国際的に見て勤務時間が長い現状があると。これは島田市についても全く同じです。そして、その多忙化の１つの在り方として、その下の２の「チームとしての学校」の在り方等が文部科学省で挙げられています。

次のページにいきますと「教員以外の専門スタッフの参画」というところが（１）の②、右側の上のほうですね。例えばどんなものがあるかというと、スクールカウンセラー、中学校区の小中学校に一応全校配置はしています。毎日勤務ではありませんけれども、全校配置が県の処置でされています。スクールソーシャルワーカーは、島田市はいち早く県内でも取り組んだ画期的な取り組みとして成果を上げております。あと、学校司書であるとか、部活動の指導、そこには医療的なケアを行う看護師等というのもありますけれども、この中、多くの施策を島田市のほうでも推し進めてくださっているのは、大変ありがたく思っております。

次のページにいきまして、「チームとしての学校」像（イメージ図）というところがあります。現在は、学校教職員に占める教員以外の専門スタッフの比率が国際的に見ても低い構造で、複雑化・多様化する課題が教員に全て集中し、授業等の教育指導に専念しづらい状況であるということです。

そこで、コミュニティ・スクールの資料がありますので、その中の１番最後のページ、少し見ていただきたいと思います。文部科学省が今推し進めようとしているものですけれども、島田市教育委員会としても夢育、知育推進事業もあって、地域との連携を持とうというように、いろいろな事業に働きかけをしているところですが、コミュニティ・スクールの１つの在り方として、文部科学省で出しているものに、その真ん中の図の中央、やや下のところに、統括コーディネーターや地域コーディネーター等が委員として参画というのがあります。これは、社会教育課のほうで、島田二中でやっている学校支援地域本部事業に類似するものでして、文部科学省は、それとの合体を１つのコミュニティ・スクールの形と。幾つかのモデルが示されているのですけれども、それも１つの形で今出されています。そういう意味では、島田市の夢育、知育事業の在り方と非常に共通するところがありますが、なかなかコーディネーターについては、資質が求められるところでもあります。それで、学校教育をサポートするというような形になるわけです。

次に、生徒指導関係で、これは公表ができないものですから、教育委

員の皆様、市長等にのみ分けられている資料ですが、いじめ問題等の統計資料が手元にあるかと思います。平成27年度は問題行動件数が、小学校も中学校も大変減少しています。ここは近隣３市の中でも飛び抜けて島田市は少ないわけなのですが、しかしその中にも課題は抱えております。中でも、小学校低学年での授業放棄が増加している。問題行動が減少してきたとはいっても、粗暴行動の低年齢化への対応が島田市の課題であることが、改めて確認できるというようにそこにあります。そして、またその下、27年度は発達特性からこだわりが強く、発達障害と言われている児童生徒ですね。こだわりが強く、折り合いを付けることが苦手な子どもがトラブルを起こしたり、虐待やＤＶ、ネグレクト等による環境要因から不登校になったりしているケースが極めて多かったというのが、実は問題行動件数やいじめ・不登校なども減少している中で、現実にあらわれているという結果が出ております。

実際に私も昨年度まで現場にいましたけれども、貧困家庭の問題、虐待、ＤＶ、一人親家庭は年々増えています。両親ともにいない生徒もいました。里親や養子の生徒もおりました。特に発達障害においては、小学校における表れが顕著な傾向があります。その下の市内問題行動件数の内訳１の（３）ですけれども、小学校での粗暴行為が中学校とほぼ同じということは10年前には見られなかった現象です。

その次の資料、最後の資料になりますけれども、市の公聴会で出した資料です。最初の資料は、市内公立小中学校特別支援教育に関するアンケート小学校編というところです。少し見にくいのですけれども１の（２）のところを見ていただきたいと思いますが、通常学級における対象児童数の割合の合計のところを見ていただくと9.9％と表れています。平成27年度、昨年度です。全国でも約１割といわれていますので、通常学級における特別な支援が必要な生徒は、ほぼ１割。9.9％。島田市も全国と同じ傾向があります。

その下にいきますと、２番、特別支援学級の指導の充実についてという資料がありまして、特別支援学級の在籍児童数ですね。就学支援に至った生徒ということになりますけれども、小学校、昨年度は１年生から６年生まで合計63人います。約1.05％。この後ろに中学校編というのがあるのですが、中学校は2.05％で２倍になっているのですね。また、戻っていただいて小学校の低学年は大変就学支援が低いことが分かります。そして学年が上がるにつれて上がっていくと。それで中学校になると２倍になると。ということは、小学校低学年における就学支援が課題であるということが言えるかもしれません。特別支援学級においては、特に（３）の表ですけれども、自閉情緒のクラスにおいて大変大きな課題があるのが分かります。

それで、次のページにいきまして、通級指導教室。小学校の場合は通級指導教室というのがあるのですけれども、そこのところ（１）で現在78人、合計１年生から６年生まで78人という数字があります。昨年度ですね。今現在、島田第一小学校で通級指導教室を行っていますけれども、今満員の状況です。なかなか通級指導教室も満員ですと就学指導委員会

のほうも、通級指導教室が適当であると判断がしにくい判断があります。判断をすると、通級指導教室に行かなければいけないが、今現在、教室がいっぱいで行けないという、そういう問題があります。

あと、その下にあるⅡの個別の指導計画及び教育支援計画というものがありますが、個別の支援計画というものと指導計画。教員が作る指導計画と保護者と共に作る支援計画というのがありますけれども、支援計画はできるだけ作るのが望ましいというように言われているのですが、なかなか作成できない現状があります。教員がまず作らなければいけないのが、毎学期ごとの成績がありますよね。そして、１年間を通じての学習指導要録があります。中学校の場合は、それにさらに高校へ提出する調査書があります。そして、進学先に提出する抄本を作成するということで、その中でなかなか指導計画、支援計画。さらに、最近文部科学省で中高を連携する新しい形の様式を作って、情報を共有できるようなものを今作成するなどということを言っています。それができたら教員は、どうなってしまうのだろうかというような現状もあります。

最後のページを見ていただきたいのですが、施設面の整備についてですね。これはたまたま載せるつもりはなかったのですが、藤枝市、焼津市、島田市の比較が出ているのですが、質、量ともに確保されているという、確保されているのは質的改善が必要、数が不足している、これは支援員のことが主なのですけれども、島田市は比較的対応はしてくださっていると。しかし、その質的向上が必要だというようなデータが出ているかと思います。

それと、就学支援の状況ということで、市就学支援委員会に諮られなかった生徒が中学校の場合は35％いるということで、保護者の同意がないと就学支援委員会に諮られないわけなのですけれども、こういう生徒たちの特に自閉情緒の生徒の進学先に対しては、非常に中学校のほうも苦労しているという現状です。

以上、資料を提供させていただきます。

染谷市長　ありがとうございました。

事務局から説明が終わりました。

夢中で聞いていたものですから、教員の多忙感ということでありました。主な要因としては、１つに生徒指導、個別指導、補習、家庭、保護者への対応等ですね。２つ目の要因としては、特別な支援が必要な児童生徒への対応、３つ目は部活動が挙げられるということありますけれども、これらの課題について、その解消へ向けての方策を含めて御意見を伺いたいと思います。御意見については、必ずしも本日の会議で結論付けるものではなくて、次回以降に継続的に協議していくことも考えられますので、ぜひ多くの御意見をお寄せいただければと思います。

まず、（１）の生徒指導、個別指導、補習、家庭、保護者への対応について、御意見があればお聞かせください。お願いします。いかがでしょうか。生徒指導、個別指導、補習、家庭あるいは保護者への対応について、何かお気づきの点や日ごろからお考えであることがありましたら、聞かせてください。いかがでしょうか。牧野委員長ありますか。

牧野委員長　私どもの会社では、就業時間等、いろいろ労働基準法との問題がありまして、ある程度、制約をされています。そんな中で効率良く仕事をこなすこと、それから一人では手に負えない場合には、社内での作業の細分化等、即検討するわけなのですが、どうも学校のほうでは、まず１つ目のいくら働いてもいいというのですか、制限といいますか、その辺が、今資料が無いものですから分からないのですけれども、余り明確ではないのかなと、これは憶測です。

それから、先生方が例えば生徒指導のために資料をいろいろ作られるのですが、非常に熱心な先生が多くて、学校訪問になりますと本当に真面目に、すばらしい授業をやっていただいているその授業、40分ぐらいの授業にかける時間が相当な努力があるのではないかなということで、ついつい子どものために頑張ってしまうという先生方の真面目さといいますか、それを押さえるものが今のところ明確に無いということがあるのかなというように思いますね。夜、学校の前を通りますと、電気もかなり遅くまで付いておりますので、電源を切るとか、会社ではそういった強行策が取れると思うのですが、学校ではそういった対策もできないので、皆さんの上部の方の指導に頼るしかないのかなというように感じております。

染谷市長　ありがとうございます。

学校の先生は勤務時間、確かに市役所だとチャイムが鳴って終了時間のお知らせがあるわけですけれども、学校は先生の勤務を終えますよという時間が不明瞭で、ついつい長引いてしまうというようなこともあるのかもしれませんね。それから、資料作成等かければかけるほど、手間がやはり丁寧に一生懸命やろうと思えば思うほど、時間がかかることが多くなるということがあるのかもしれません。今、牧野さんの御意見に関連してでも構いません。他のことでも構いませんが、いかがでしょうか。北島委員、いかがですか。

北島委員　教育委員会としては、大分前から年に１回、２回。「教育委員会からの提言」というのを出しています。これは生徒たちだけではなくて父兄ですね。家庭に向けて何かメッセージを提言という形で伝えたい。それによって、その教育の効果を上げたいということだろうと思います。先ほど家庭の教育というのが学校の教育に、その分だけ割り込まざるを得ないというのか、引き受けざるを得ないというのか、そういう状況に立ち至っているというのが現状であるという話がありましたけれども、これはやはりできましたら、いくらかでも戻せるところは戻したいと思うわけですね。

なかなかこれまで、いい提言があったと思います。何年か前に例えば「子どもを不幸にする一番確実な方法は、いつでも何でも手に入れられるようにしてやることだ」というのを、ルソーがかつて言っている。これは今でも実は変わらないのではないだろうか。何か足りないもの、何か我慢すべきものを、そのタイミングでやはり必要な時期があるのだろう。こういうことを家庭で考えてみて欲しい。これは非常に奥の深い提言だったと思いますが、どのくらいこれがそのように受け取られたかど

うかは、分かりませんけれども、やはり一方では効果はともかくとして、やはり気がついた提言は、これからも続けていくべきではないだろうかと思います。家庭の教育というのは、学校で全部引き受けられるものでしょうか。僕はやはり無理ではないかなと思うのですね。いくらかはできる部分はあるかもしれません。これは、やはり少し戻さなくてはいけないのではないかと。

それと、今年の３月に社会教育委員会から活動の成果をいただきました。大変すばらしい内容でした。次の世代に何を残さねばならないかということだったと思うのですけれども、ここにやはり地域での伝統文化とか、それから家庭での教育というようなことを、かなり取り上げてくれていたと思います。こういうものを、では誰が、これを具体的に引き受けられるのかということになりますと、これはやはり地域の人たちなわけなのですが、なかなか仕事をしている世代の人たちは難しい面もあるわけですから、できる方はいいのですけれども、いろいろな内容を具体的に少し煮詰めていくことによって、社会教育委員会の活動と一緒になってこれをある程度、地域や家庭でその教育を分担できるような、先ほど社会教育というのはいろいろな広い意味と狭い意味とあるのかも分かりませんけれども、学童期の家庭教育も社会教育の１つに入る可能性はあるのではないかなと思っております。何かそういった地域での人材をうまく活用して、その地域だけでいいと思うのですね。それぞれが、各地域がみんな同じ内容で一列に並んでではなくていいと思うので、できるところからそういったことをやってみてはどうかと思います。

染谷市長　ありがとうございます。

家庭教育の、それこそ在り方もあるのですが、私は委員に少し伺いたいのですが、日本の教育はどうしてこんなに家庭教育の部分まで学校が背負い込まなければならなくなったのでしょうね。お考えございますか。

北島委員　部活動もそうなのですけれども、学校で頑張り過ぎているのか、これは難しいところですが、例えば少し話がずれるかもしれませんが、部活動にしますと、学校の先生がやるということは、もう本当に外国ではあり得ないことです。なぜ専門家がきちんとやらないのだという、逆にそういう目で見られています。実は会社でもそうだと言うのですね。例えば、会社に入社しますと一から現場を回って、そこで教育をし直します。専門家がその時点でいるわけではないわけですね。でも何年か、あちこちやっているうちに、それなりに専門化する人もいるし、また逆に総合的に全部、トップにいても現場のことをよく知っている、そういうすぐれたリーダーが生まれるわけです。日本のそれが良いところです。それは実は学校でも、それから日本のあらゆる社会でも歴史的に見ると明治以降、そういう風土といいますか仕組みで来ています。実はそれは元々どこにあったかというと江戸期だったというように思います。江戸期は平和な200何十年間の時代がありました。その時に、侍が本来の仕事である戦の準備、訓練ということが必要なくなったのだけれども、それ以外の仕事は無くて、タダ飯を食べていると。これは非常に具合の悪いことが起こったわけです。ところが、その時に何をしたかというと、武士階

級は、それでは国を治めるほうの手伝いをするよと。つまり、官僚になったわけですね。役人になったわけです。これは非常に日本の歴史の中では、特異なことのようでありまして、西洋ではちょうど同じような中世には武士に相当するのは騎士というのがいました。騎士道、同じようなことでした。彼らはそういうことをやったかというと、全くやってないですね。何をやっていたかというと「さあ今日はオペラだ、恋だ」と言って、そういう変わらない生活を、戦争が余り無くなっても、そういう生活をしていました。日本だけが「では俺たちがやるよ」と。「できますか」と言ったって、最初はできないはずなのですが、みんな現場でとにかくやる。例えば、財政などはヨーロッパでは誰がやっていたかというと、ほとんどが商人ですね。有力な商人が財務の仕事をつかさどっていた。政治はまた、その当時やっていたのはヨーロッパの大学で法律を学んだ人たちがやっていた。みんな専門家が最初からあって、そのセクションを分担してやっている。日本だけですね。江戸期に政治の専門家でもない、財務の専門家でもない侍が、全てぱっと取ってしまったみたいなことでしょうか。その伝統は、ずっと実は今の日本の社会全体に生き続けています。良い伝統に、これが既になっている。良いか、悪いかわかりませんが、多分良いと思います。だけど反面、先ほどの学校の、例えば部活動のように、それもこれも全部引き受けてしまう、専門家に任せないというところが出てきているのではないかというのが、私が唱えているのではなくて、これは笠谷和比古という歴史学者だと思います。帝塚山大学の先生だったと思いますが、その方が言っていることなのですけれども、やはり１つはそういう、だからと言ってそれが分かったからと言って、それが即変えられないので残念ですけれども、ただそれが外国では一般には通用しない概念であって、日本の社会のむしろ、それがしかし武士道精神を中に含んだ形で入っているのであって、悪いばかりではないわけですね。だけど、これは免れ得ないです。だけど、世界と比べてこれだけ違うということは、一応承知しておくべきかなというように思います。

染谷市長　そうですね。私は進行を務める役で発言はいけないのかもしれません。同じように、やはり国際的に見ると人の人格とか、心とか、それから倫理観、正義。こういったものを教えるのは、教会が果たす役割が大きくて、宗教が果たす役割が。そこへいくと、日本はその宗教が果たすべき役割のところまで、学校教育が肩代わりしているというところもあって、何もかも学校にしわ寄せが行くということもあるのかなと感じているところでもあります。いかがでしょうか。他に御意見ありますか。よろしいですか。どうぞ。五條委員、お願いします。

五條委員　お願いします。今、北島さんが家庭教育に学校がたくさん入っているという、そんなお話を最初にされたのですが、学校というか、教員は子どもの力を付けるということが一番なのですけれども、信頼関係ということをとても大事にしていると思います。それで、信頼関係ということを頭に置くと、ここの（１）の生徒指導も個別指導も補習も家庭、保護者への対応も全て学校、教員がやらなければいけないのではないかとい

う考えのもとで、進めているのではないかということを考えます。でも、先ほど、学校教育課のほうからコミュニティ・スクールとか、チーム学校という資料をいただいて説明を受けまして、やはり学校や教員だけではなく、これらの専門スタッフとか、地域の方とか、そういう方たちと一緒に協働で進めていくということが多忙化の解消の１つなのかなと思います。

私、チーム学校というページのⅡ－４のページの図なのですが、従来、現在、チームとしての学校、この３つの図を先ほど説明のお話を聞きながら、ずっと眺めていたのですが、チームとしての学校というところに移動していく。ここが鍵ではないかなということを強く思いました。

１つ、これは質問なのですが、３つ目の図の地域社会がまた途切れているような形になっていますが、これは前のページに矢印が同じ図で矢印が３つあるのですが、この矢印はあると考えてよろしいかどうか。それだけ伺いたいです。

染谷市長　事務局、分かりますか。質問の趣旨が。

池谷学校教育課長　これは学校を主として描いたものですから分かれていますけれども、当然あるものであって、これは学校から見たイメージをクローズアップしたというように考えられます。

染谷市長　矢印は付いているということですね。

五條委員　はい、分かりました。それなら余計に強く、今のチームとしての学校ということで理想だなということを考えました。ありがとうございます。

染谷市長　高橋委員、いかがですか。

高橋委員　先ほど、部活動のことが北島委員から出ましたけれども、私も部活動の指導に関しては専門的な知識や危険を回避できるような知識を持った方が行っていただくのがいいと思います。ただ、それには学校側との意思の疎通、それから保護者との信頼関係。これは欠かせないものではないかなというように思っております。

少し戻って、１番の生徒指導云々というところですけれども、今五條委員がおっしゃったように、チームとしての学校の構図になればいいなと思いますし、今まで学校訪問でおじゃました学校でも、これに近くなっている学校が何校かあったと思うのです。それは、やはり管理職の校長先生や教頭先生の考え方が、随分大きいなというように感じております。教育委員会からの提言等を土台にして、それから学校経営を考えていらっしゃる先生方もたくさんいらっしゃって、何が一番子ども達のためにいいのかということを考えていただくと、このスクールソーシャルワーカーさんとか、カウンセラーさん、それから専門スタッフの方を入れたり、また教育センターの先生方との意見の綿密な交換があって、初めていろいろな子ども達に対応できるのではないかなというように感じています。

ただ、例えば同じ学校訪問におじゃましても、先ほど五條委員おっしゃいましたけれども丁寧に作っていただく学校と、ざっとこの今日の１日の予定ですという１枚の紙を出していただく学校と、それだけ差がありますね。この活字にして打ってプリントアウトしてホチキスで留める

	というこの時間も、やはり最低限のものにしていくということが当たり前というようになると、分厚い資料をそろえることが仕事をしたということではなく、言葉で相手に状況や気持ちを伝えられるようなシステムになっていかないと先生方の負担は、なかなか減らないかなというように思います。 学校に上がるまでのしつけは親が責任を持って行い、基本的生活習慣は付けたいのもです。 母子手帳をもらうところの健康づくり課の保健師さん、それから大きくなる過程で主任児童委員の皆さんや民生委員の皆さんにお世話になり、また幼稚園や保育園でお世話になった、地域の方にお世話になった中で、だんだん100％に近づいていく。98％ぐらいで小学校に上がれば１年生の先生の負担は随分変わるのではないかなというように思ったので、その辺を学校だけがやるのではなく、やはり地域の方含めてお手伝いいただいてということが最善かなと思っています。
染谷市長	そうですね。
高橋委員	それぐらいでしょうか。
染谷市長	まとめをしていただいたような感じですが、本当にそういうようになっていくと、やはり我々が学校に上がる前のお母さん達をしっかり育てていくという親育のところも、大変大きなこの教師の多忙化を防ぐためには必要なことだというような、そういった論点も浮かんでくるかなと思いました。 もっともっと語り尽くしたいところではありますが、時間も限られておりますので、（２）の特別な支援が必要な児童生徒への対応ということで、御意見がある方にお伺いしたいと思いますが、いかがでしょうか。教員の多忙化として考えられえる要因として、特別な支援が必要な子ども達への対応ということですが、御意見ございますか。いかがでしょうか。 では、私のほうから学校教育課長さんに、少し伺いたいのですが、指導主事でも結構です。どなたでもいいですが、特別な支援を要する児童生徒のパーセンテージというのは、島田市の場合どのくらいになりますか。
池谷学校教育課長	教育委員の方々、市長のほうには手元にあると思いますけれども、先ほど言いました全国的には約10％と言われています。
染谷市長	10％と言われていますね。島田市もそのぐらいということですね。
池谷学校教育課長	9.9％ですから。
染谷市長	9.9％。
池谷学校教育課長	小学校が9.9％ですね。
染谷市長	はい。
池谷学校教育課長	ですから、約10％。１割と考えていただいていいと思います。
染谷市長	分かりました。確認をいたしました。１割ということです。

池谷学校教育課長　誤解があってはいけないと思うのですけれども、通常学級における特別な支援が必要な生徒が約１割。これは全国でも島田市でも同じ傾向があるということです。

染谷市長　通常学級における特別な支援が必要な子どものパーセンテージが約１割ということだそうです。いかがでしょうか、御意見は。五條さん、ありますか、何か。よろしいですか。

五條委員　先ほど個別の指導計画、支援計画の話が学校教育課長さんから出たのですが、これを一人分作るのはとても大変なことで時間もかかるし、支援計画のほうは保護者と話を聞きながら作るということで、本当に大変なことです。それを10％ということは、30人いたらクラスに３人、担任が３人分を作って保護者と連絡をし合ってと、本当に次の日の大事な授業の準備もさておき保護者と会うという、そういうこともきっとたくさんあると思います。特別な支援が必要な児童生徒の対応というのは、その計画を作るだけではなく、実際に本人との指導、それから保護者との話、日常生活においてもたくさんの時間と力を必要として、本当に多忙ということはとてもよく伝わってきます。それについてどうしたらいいというのが、まだちょっと私のほうでは具体的には考えが出ないのですが、とにかく多忙だということは本当によく分かるということを、この場で言いたかったです。

染谷市長　その通りですね。他にはいかがでしょうか。ございますか。教育長、ありますか。よろしいですか。

濱田教育長　特別な支援の必要な子ども達と、それから発達障害があるという子と、やはりちょっと混同してはいけないなと思うのですね。発達の中で十分な手がかけられないでいる結果として、少し支援が必要だという子もいるし、もともとの病的なと言うのですか。ある障害としての発達障害がある子ども達といるということは御理解をまず、いただきたいなと思います。それを併せて10％近い方がいるのではないかな。ですから、きちんと病気として判断される子はもう少し少ないけれども、でもかなり大変な子ども達が現場にはいるということは事実だと思います。

市としては、支援員を大変多く配置してくださっているものですから、その力によってかなり救われている部分はありますし、市教育委員会で行う支援員の研修会も発達障害に係るような指導をしてくれていますし、もみの木のほうでやっている支援員の講座でも発達障害に係るような講座を持ってくださっているものですから、そういう意味では支援員の質が大変上がってきているなと思います。

今後も質の高い支援員の確保ということが、学校現場としては求めるところではないかなと思います。数を増やすということだけではなくて、質の問題も問われてくると思っています。

染谷市長　おっしゃるとおりですね。また、子どもそのものに特別な支援が必要ということだけではなくて、実は市役所、当局側の子ども子育てのほうを見ますと、最近虐待、ＤＶ、それから家庭児童相談所に保護される子どもの数。これが急激に増えておりまして、さまざまな家庭環境による課題も待ったなしの状況。人員を増やさなければ対応できないほどの増

え方なのです。これは、やはり学校教育現場へもさらなる負担をかけることになっているかなというように判断をしています。

そうした学校教育現場と、例えば行政の子ども未来部との連携でありますとか、こういった連携も密にしていく中で情報交換をしながら、それが教師の多忙感をいくらかでも解決できる方法につながっていくといいなというように思います。

他にはよろしいでしょうか。

濱田教育長　先ほどの問題と少し重なる部分があるのですが、小学校の低学年における粗暴行為、要するに問題行動が多くなっているということが言われていますが、もう１つの傾向として一人の子が繰り返すということが多いです。そういう傾向があると思います。よくよく見ていくと、そういう繰り返す子の多くが発達的な障害を持っている傾向があると思うのですね。ですから、問題行動と生徒指導的な問題、多忙化と、それからこの特別な支援の必要な子というのは、かなり重なってくるということも理解が必要だと思います。

島田市の場合は、そういう意味では、ある程度うまく回っているかなと思います。例えば家庭児童相談室と教育委員会。もっと言うと生徒指導的な問題についての警察の生活安全課の関係との連携がうまくいっているのではないかなと思います。そういうところで情報共有することによって早期解決とか、早期対応ができているのではないかなと思います。

それから、もう１個、こういうような、例えば生徒指導、発達障害を伴う子どもの、例えば問題行動が起こった時に、各学校に求めているのは即日対応、複数対応ということです。それは、問題が起こった時に、次の日に事を送ってしまってはこじれてしまう。特に被害、加害があったような問題については、学校がたとえ遅くなっても、先ほどの時間外に関ってくるのですが、即日対応、それも複数で対応するということをやっているものですから、それが最近の問題行動の減少にもつながっているけれども、一方で時間外が増えるということにもなっているということがあると思うのですね。やはり、一人で対応するよりも複数で対応することによって複数の人の時間外が増えますし、即日対応というと例えば私が第二中学校にいる時も、家庭訪問をして帰ってくると10時過ぎになるというようなことも度々ありました。でも、それをやったからこそ、次の日の対応、その後の対応が楽になるということもあると思うのですね。ですから、対応をきちんとするということと、それから時間外が増えるというところには大きな相関があるものですから、時間外だけで考えることも、なかなか難しい問題があるということは言えると思います。

以上です。

染谷市長　ありがとうございます。大分ここのところは、いろいろと課題が浮き彫りになり、かつまたその対応も見えてきたところではあります。

では、３番目に部活動についての御意見がありましたら、お聞かせください。先ほど、高橋委員から学校側との意思の疎通あるいは信頼関係というものは欠かせないよというお話をいただきました。加えて御意見

のある方はお願いいたします。いかがでしょうか。よろしいですか、部活動のほうについては。もし、御意見あれば。

濱田教育長　これも大変いろいろな要素を考えていかなければならない問題だなと思います。例えば、なぜ学校現場で部活動が熱心に行われているかというと、単なる勝ちたいだけではないと思うのです。例えば、生徒指導の面から考えますと、勉強で活躍できない子が部活動の中で活躍できる。勉強も見ている、部活動も見ているという先生によって、いろいろな細かい配慮や指導があるから、そういう子が救われているという面もあります。ですから、逆に部活動が終わってしまう３年生の夏休み以降に、生徒指導が少しまた荒れてくるというようなところは、そこにあると思うのですね。だから、部活動顧問をしている先生方が、その子を丸がかりで指導してくれるというところが、日本の部活動の良さでもあるし、今まで続いてきている面ということも否定はできないと思うのですね。

ですから、どこまでやることを求めるのか。または、どこまで外部に委ねるのかということについては、委ねることによって例えば丸がかえの指導が少し手薄になるということも保護者の皆さんに理解をしていただかなければならないし、地域の皆さんにも理解をしてもらわないと、今までと同じようにはいかないということについて、やはり理解が必要ではないかなということを思います。そうでないと、学校だけ楽しているのではないかという批判が起きてくる心配を私は持っています。

染谷市長　そうですね。

北島委員　別の切り口からですが、６月８日の某新聞の欄に「春秋」というのですから、ごらんになった方は分かるかもしれませんが、とにかく部活というものは遅くなるというのが広辞苑でも用例が出ています。まず、出てくるというぐらいに、遅くなるというのが、性格をまさに端的に表していますが、熱が入ってつい長引くのが部活というものだという。これはもう間違いないことでありますが、それが高じて生徒は疲れ果てて、先生達の、これが問題です。先生達の婚活も、それから自分達の子どもを保育園へ入れる保活と言うらしいですが、それもままならないような事態になってきていて、これが深刻なことになっています。こういうことを、やはり放置したまま今後続けていくと就活の学生からも敬遠されて、教育界に進もうという優秀な学生をどんどん逃してしまうのではないか。こういう心配があるということを指摘しています。

そういうことで、やはりこれはいろいろと長年続けてきた結果でありますから、そんなに簡単に直せないかもしれませんが、方向性としてはできるだけ少しずつ撤退するような方向へ進めるべきではないかなというように一応思っております。

染谷市長　そうですね。学校現場では、部活動の指導で土曜も日曜もなくなって、毎日とにかく部活の指導を励みにしてやってくださる先生方も昔から大勢いらしたわけですけれども、傾向としてはどうなのですか。やはりプライベートな時間も持ちたいという先生が増えてきているのでしょうか。

濱田教育長　そこは、調査をしてみないと、はっきりは言えないと思います。議会

でも少し答弁させてもらいましたが、やりがいを持っていると言うのですかね。そういう先生は、かなり大勢の方がいらっしゃると思います。一方で自分の得意種目というのでしょうか、経験したことのない種目を担当せざるを得ないという先生方もいると思います。いろいろな部分で複数担任制や、または研修の機会、講習の機会というのもあるものですから、そういうところで勉強しながら前へ進んでいるのですが、それでも負担を感じている人はいると思います。どこで手を打つかというのは大変難しい問題ですし、先ほども少し言いましたが、やはり保護者理解が十分でないと、もっともっと強くして欲しい。または指導の、簡単に言いますと、練習日が少ないのではないかということを、はっきり部活顧問に求められて、部活顧問が困るというようなことも実際問題としてあります。

ですから、強くするために練習日をもっとという要望については、やはり応えられない部分もあるし、それを余りにも求め過ぎないという保護者の皆さんへの理解というのも必要になってくるかなと思います。

もっと根本的なことを言いますと、中学校の場合は、部活動は中学校体育連盟の大会と結び付いています。その辺の改善までしていかないと、やはり簡単に解決する問題ではないなということを思います。

染谷市長　ありがとうございました。どの課題も一長一短では解決できない難しい要因が含まれているというように、今日の皆さんの御意見を伺って認識をいたしました。しかし、そうは言いましても島田市も市単で学習指導員他、たくさんの支援員を現場に送っております。これは、今後もしっかり続けていく方針ではありますけれども、さらに先生方の多忙感を少しでも和らげることができる、そういう取り組みについて積極的にやってまいりたいと考えているところです。

では、今日は２番の多忙感解消へと取り組みというところについて、ここは報告というか、お話があるでしょうか、事務局のほうから。どうですか。よろしいですか。

鈴木教育総務課長　はい。

染谷市長　分かりました。では、ここに書いてあることを御参考にしてください。今日いただきました御意見につきましては、引き続き今後もこの総合教育会議の中で深めてまいりたいと思いますが、今日せっかくの機会ですから他に御意見のある方、ありましたらどんなことでも構いません。ちょっとお話をいただければと思いますが、いかがでしょうか。

濱田教育長　事務局からのお話の中にもありましたが、先ほど私の話の中にも触れさせていただいたのですが、最終的には人の問題になるということを思います。部活動についても、部活動の外部人材にしても、それから支援員についても、それ以外の地域人材の活用についても、最終的には人材だなということを思います。人材ということについては、やはり学校教育であるという大きな前提のもとに入っていただくことが、より子どもたちの教育に効果が上がると思うのですね。ある技能を持っていても、それをその方が教育的な視点に配慮が欠けると、いくらいい技能を持っ

ていても、それが生かされない。逆に言うと、マイナスに作用する場合もあります。そうなった時に、いかに学校現場がそういう人材を活用できるかというと、やはりコーディネーターの存在というのが欠かせないなと思います。では、そのコーディネーターが島田市にいるかというと、そう簡単にはいないと思います。今までいろいろな活動をしてきている方を確認しながらコーディネーターの育成。要するに、人材育成みたいなことが、今後また考えていかなければならない課題ではないかなと思います。コーディネーターがきちんと育てば、かなり学校現場というのは、いろいろな部分で地域人材を活用することにおいてのメリットを受けることができるのではないかなと思います。

これは子育てとか、それから社会教育とか、または生涯学習みたいな多方面に知識を持った方が必要だと思うものですから、教育委員会サイドだけで育てるのではなくて、子育て関係のノウハウを持った方。そういうような方を巻き込むことが大事ではないかなということを思っています。

染谷市長　そうですね。まさに、コーディネーターの人材確保、人材育成というのが、これからの鍵になってくると私も思います。私自身がいつも思うのですが、子ども子育て支援と言いましても、教育委員会サイドとそれから行政の当局サイドでは担当の課が違う。この中の意思の疎通や連携１つ取っても、もう少し重ねられれば現実的な答弁ができるのではないかとか、こう思うことが度々やはりあります。ぜひ自分のところの縄張りだけではなくて、お互いに意思の疎通をしながら、これが学校教育現場、子育て支援現場、生涯学習。そして地域でのさまざまな地域活動の支援というようなところにもつながってくると島田市の島田型の支援の在り方ということが見えてくるのではないかなと。そういった形になるように目指していきたいなというように思うところです。

北島委員、御意見ありますか、何か。

北島委員　今の御意見は大変すばらしいなと思いました。まことに賛成です。

もう１つ、そうですね。少し付け足し的なものですが、部活の問題。それから教育の、先ほど言った単に勝ち負けの問題ではないという話が出たのですけれども、これに係ることで大事なことをもう一度原点に戻りたいと思いますが、島田市の教育の特徴としていきたいなと思うことが１つあります。これが、親にとってみれば「我が子のより良い人生」ではなくて、その「我が子が生きていくより良い社会」を将来は作り上げたいのだということなのですね。

人は他者に勝った時に幸せを感じるでしょうか。少しは感じるかもしれませんが、そうではなくて、他者に役に立った時に、役に立つ存在になった時に幸福や生きがいや永遠を感じるのだということを子どもたちにも親にも伝えたいなと実は思うわけでありまして、これは教育を見直す時には、やはり一番僕は大事なところではないかなと思います。だから、例えば部活でも勝つということは、確かに価値はあるのだけれども、それが幸せで、それが全てかと。そうではないのだと。いろいろな面で勝つのは一方だけ、どちらかかもしれませんね。でも、そうでない側、

負けた側も同じように、その何か生きがい、やりがいを感じることができる。そういうことを通して、その単に勝ち組になったから幸せなのだという価値観。こういうものをこれはちょっと見直ししたほうがいいのではないかというメッセージを伝えたいなと実は思っています。

以上です。

染谷市長　ありがとうございます。今のお話を聞いていて少し思い出しましたが、昨年の暮れでしたか。フェイスブックのＣＥＯ、まだ31歳でしたけれども、初めての赤ちゃんが生まれた。我が子を抱いてフェイスブックの株の95％、５兆3,000億円を今後20年間の教育活動に寄付すると言ったのですね。その時の言葉が「我が子に幸せになってもらいたい。そのためには、我が子が生きる社会そのものが幸せな社会でなければ、我が子は幸せになれない」と。そのために自分が持っている資産を、これからのより良い社会の実現のために寄付したいという言葉があって、かなり印象に残りました。

まさに、今おっしゃった我が子のより良い人生ではなくて、我が子が生きていくその時代の、より良い社会を目指したいと。我々も同じ思いを持って、島田市の総合教育会議を進めていきたいなというように思った次第です。

牧野委員長、まとめに何かいかがでしょうか。

牧野委員長　申し訳ありません。それこそ池谷課長から、教科の中だけでない、いろいろな教育の中で切実なものが２、30あるという話で、○○教育というのがありますよね。私もちょっと学校のほうにお願いをして、業界のほうでやらせてもらいたいということでお願いをしていることが、実は切実な○○教育の一つであるということを今日聞きまして、もう愕然としました。教科の中にある教育をやるのも大変なのに、市内に業者で、ちょっと学校におじゃまして教室を開きたいというお願いを今しているところです。他の市を言ってはまずいのですけれども、他の市では、その価値を認めていただいて、もうお正月ころから予約が入っています。片や島田市は、今現在、校数は大体決まりましたけれども、事前打ち合わせの日も決まっていません。それだけ島田市は、教科の中に費やす時間で大変お忙しいのだなということを今日、感じました。

そういった意味で、教育長が先ほど言われたコーディネーター育成。これはもう最短でやらなければ、やり始めたほうがいいかなと本当に思いました。そのコーディネーターの方に私がお会いして、実は環境教育ではこういうことをやらせてもらっていまして、先生方には体育館だけお借りすれば結構ですという話を、そういう話をできる人材をどこかにいただければ、この20、30のある○○教育というのが、もう少し学校にお任せをしなくてもできる可能性があるなと今思いました。ありがとうございます。

染谷市長　すごく気持ちが伝わってきました。実際私なども、もっと防災教育をやればいいとか、いろいろ市民の皆様や御意見をいただくことがあるのですね。でも、防災教育だけではなくて、交通安全教育も、防犯教育も、いろいろなことをやっているものですから、その防災教育だけを重点的

にやるわけにもいかない。ですから、現場をより知っていただくことの必要性も感じましたね。ありがとうございます。他にはよろしいですか、御意見。

高橋委員　全くこの今日の議題には全く関係無いことですけれども、いいですか。２週間ほど前の静岡新聞のコラムの１つに、専業主婦で子どもを家で育てて幼稚園に入れたという方の話が載っていました。今の安倍政権は専業主婦で、家で子どもを育てているお母さんたちのことを評価していただいていない。一億総活躍、それには全くそのことを書いてもらっていないという意見が出ていました。もうその方は私と同じくらいの年代で、子どもは嫁ぎ、皆社会人になりましたと書いてありました。まさしく私は読んでいて、私と同じだなと思いました。それには私を養ってくれる夫がいて、私と子どもたちの生活を支えていてくれたわけです。その時には子どもを育てることが自分の仕事だと思っていました。

国会前で保育園落ちたという看板を掲げた映像を見た時に「どうしてこんなふうになってしまったのだろうな」というように、正直に思いました。

私が川根で子どもを育てた時、今も幼稚園が無いものですから、みんなが保育園へ行ったのです。でも、私は保育園に入れなくても幼稚園の時間帯で良かったのです。10時から２時までで、あとは自分で見られたのですけれども、無いのでそこへ入れた。だから、必要な人はそれですればいいのです。ただ、家で見られる人は、例えば子どもの新しい服を３枚買うところを１枚に減らし、携帯電話を少し料金が小さな枠にすれば母親が３歳に子どもがなるまでは、そばにいられるのではないかなというように、最近小さな子どもさんを持つお母さんと接することが多くなって、自分のことを振り返ってみて、すごくそれを思うのです。決して職業婦人が、どうこうと言うのではありません。保育園に入れなければならない事情の人もいます。お一人で子どもを育てられている方もいるのでね。

だけど、３歳までは、とにかく幼稚園に入れる時期までは待って市で開いている支援センター、それから子育て広場。随分と増えたと思うのです。いろいろな人たちが応援してくれている体制ができたと思うのです。それを利用して、大事な３歳までを自分の手で育てて、その経験をすることってお母さんが育っていく一番の近道ではないかなと今感じています。それが幼稚園、保育園に入り、そこで友達を広げ、さらに小学校へ入り、家庭教育学級で磨き、そして子どもたちが巣立ったあとには、例えば社会教育の場である生涯学習教育に自分も参加をすることがいいと思います。先ほど教育長がおっしゃったコーディネーターというような役目を、その中から何人もの人が担っていけれるはずだと思います。職業婦人として、子どもたちを小さい時から保育園に入れている人たちは、社会のためにその社会保障を担ってくださっていると思います。

若いお母さんたちは、妊娠をした時にもう今は保育園の受入場所を探すと言われています。何とさみしい世の中だろうと。我が子をせっかく授かって生めるのに、自分の手で育てないで、などと思う時があります。

自分の仕事がある方は、自分が本当に信頼した保育園の先生または自分や御主人の親御さんに預けて、という人たちもたくさんいるので、その選択肢はそれぞれだと思うのだけれども、保育園に落ちたからと、がっかりしなくていいのではないかなと思います。

島田市は、ぜひそれでも、それぞれいいのだよと応援し、子育てをして次のステップに行ける人を、そこから育てる体制ができたらいいなというように、今とても感じています。

染谷市長　ありがとうございます。

高橋委員　済みません。余計なことでした。

染谷市長　いえ、いえ。私も高橋委員と同じ気持ちで、これまでもやってきたし、今もそう思っています。それで実は、私が国の政治のことを言う必要はないわけですけれども、やはり安倍政権はどちらかと言うと仕事と子育ての両立を目指す、そういうお母さんたちを応援する施策を重点的にやっていると思っています。待機児童ゼロの問題だって、その通りであります。だけれども、在宅で子育てをしている人への支援というのも、とても大事な政策なのです。

まさに子どもを生み育む性である女性の方たちが本当に人としても成長し、また親としても成長できる親育てにつながるような支援の在り方というものをしていかないと、日本の国がだめになってしまうという、そういう強い思いも持っていますので、この島田市の総合教育会議の中で話し合われる内容というものを第一にして、つないでいきたいなと思っています。これからもよろしくお願いいたします。

高橋委員　ありがとうございます。

染谷市長　では、そろそろ時間になってまいりました。ここで次回のテーマについて、私から１つ御提案させていただければと思うことがございます。昨今地方創生が叫ばれていることは、皆様も御存じのとおりでして、島田市においても一層の施策展開を計画しているというところであります。その中に、自分の子どもには、ぜひとも島田市の教育を受けさせたいと、そう思わせることのできる魅力ある教育の在り方。それから教育環境の整備。こういったものに関して、例えば小中学校の連携、一貫教育あるいはＩＣＴの活用などによる島田市独自の教育の色を明確にしていきたいというように考えております。それが地方への移住、定住の促進に資する今後の教育環境の在り方というものにつながるのではないかなと考えておりまして、ぜひ、このあたりの今後の教育環境の在り方と学校の在り方と言っても過言ではないかもしれません。こういったことについて、皆様と御意見を交わしたいと思っています。できれば、広域で連携することも視野に入れながら、この地域の特色ある教育、島田の教育。私は以前から誇りに思って自信を持っていますけれども、それをより一層展開して島田にあって特色ある教育を受けながら、島田の誇る個に焦点を当てた教育。心を育てる教育を実践できるような、そういった教育環境の在り方について御意見を交わせればと思いますので、どうぞよろしくお願いを申し上げます。

以上をもちまして、第１回の総合教育会議を閉会したいと思います。

本日はお忙しいところ、本当にありがとうございました。

閉　　会　　午後２時58分